

立ち上がった日本人の力だと信ずる次第です。

平和、平和と唱えますが平和は唱えているだけでは得られません。歴史が証明しているとおり弱肉強食、備なきものは必ず倒されます。いかなる相手でもうかつな事をしたら自己の存亡にかかると思うぐらいに装備と実力を備えないと平和は守れません。

心して平和を唱えましょう。

ルソン島敗残実記 (二)

愛媛県 矢野 正 美

組織的な戦車第二師団としての戦闘は終わって、ルソン島は日本軍の敗残・彷徨の戦場と化していました。三月上旬、穴の中で朝食を終え、中隊は総攻撃のための前線基地に向いました。谷川に降り、その支流を上流に三キロばかり行くと川は終わり、山へ上がる小道がありました。今までのような密林ではなく、ブナに似た木の雑木林で、そこを抜けると爆撃で大きな穴がいくつも開いています。遮蔽物のない所では一人ずつが早駆けで走り、目的地に着いたのは十時ごろでした。

ここで私たちの切り込み隊、清野小隊が火焰発射の準備を、藤原准尉の爆薬投てき班は陣地構築です。午後四時ごろになって切り込み隊の戦車隊長が来て、藤原准尉、清野軍曹と私の四人で敵陣地の偵察に出ました。小さな丘の雑木林を進み、

目的地のマンジュウのような形の天王山の頂上付近にはかやのような草が茂っていて、その辺りに機関銃座があるようで、腹ばいになり山の状況をたしかめると林の切れ目から頂上まで百メートルあるようだ。

偵察から帰ると、兵たちは散兵壕を掘り、准尉の班は陣地についていました。清野軍曹は偵察した地形を説明し、火焰発射についての注意を与えらる。私はこの小隊の中でただ一人の同隊の戦友である山本上等兵と共に、恐らくこの身体の中に運び込まれる最後の夕食をかき込んでいる。そのとき、ドカン、ドカンと敵弾が間近にきた。

小隊は雑木林の中に身をかがめて進む。一分隊三人、火焰発射器は各分隊に二個計六個、総勢は清野軍曹以下十人である。薄暮に隠密で敵陣地に接近し、友軍の掩護射撃のもとで一挙に火焰攻撃を予定していた私たちは、早くから敵に気付かれてはどうしようもない。予想外の事である。

辺りが暗くなり敵の曳光弾が花火のように降つ

ている。敵陣地へは三百メートル、しばらくして敵は迫撃砲を撃って来た。

最初の凹地に入ると小隊長が私を呼び「俺は先行して昼間偵察した林の出口付近に行くから、分隊長は小隊を指揮して、その位置まで来い」との命令でした。小隊長は私の復命を聞いて飛び出した途端に敵弾の直撃を受けて転倒した。小隊長の声はもうなかった。

私は大声で「各分隊は各個に前進し、敵の銃眼を攻撃せよ」と命令すると一目散に駆け出した。何人かが続いた。そのとき、誰かが私の背中を丸太棒で力いっぱいたたいたと思うような感じで、私は転倒した。胴のあたりが生温なくなり、血が流れ出た。辺りは真っ暗である。

機関銃も迫撃砲も何も恐くない。あの迫撃砲で、小隊の大半はやられたようで、前進しているのは私一人かも知れない。私は夢中で走った。不意に足もとが空を踏み、ドンと落ちた。銃は飛び、身体だけが、人の体温の中に受けられた。

最前線の天王山陣地は味方が作った陣地で、今は敵に取られているが、こちらの斜面は友軍の陣地であった。この壕には兵が二人と将校が一人いた。私は将校に私の任務を取り急ぎ報告し、私の背中への傷の手当をする。ズキズキ痛みを覚え始めたので包帯の上から巻脚絆を巻いて強くしめ上げた。

そのとき一人の兵が落ちて来た。私の部下の兵である。一人は飛行隊から来た兵で太股に重傷を受けている。今一人は山本上等兵で、彼は無傷であった。

彼の話で小隊は全滅した事を知った。私の任務は遂行できなかった。一発の火焰も発射できないままである。壕の外は相変わらず激しい射ち合いで、火花が散るのが夜空に見える。二人の機関銃隊の兵も二日間食わずここにいるという。我が軍の総攻撃は成功するだろうか。歩兵隊の攻撃の前にやるべき私たちの火焰攻撃が失敗した。済まない。そう思うと残念である。

そのころから下腹が刺すように痛み始め、どうにもならないほど苦しくなってきた。目の前が暗黄色になったり、真つ暗になったりする。死ぬ、そう思うと別に悲しい事でもないが、敵に損害も与えずここで消える事が残念である。しかし私には何もできない。自決だ、そう思って帯剣につけていた手榴弾をさぐってみたが、二つともない。

死のうと考えると急に気が楽になり、父母の顔が、戦死した兄の顔が浮かんで来た。それでいて私は手榴弾のない事に安心しているようである。そう思うとまた傷が痛む。他の兵が制すけれども黙ってはいられない、痛い。

戦闘以来の不眠と傷の痛みに疲れ切った私は、いつの間にかグッスリと寝込んでいた。気付いたときには、この深い樹海の谷間にも明るい日がそそがれていた。しかし誰一人通る人もない。時折聞えるのは機銃の音だけである。私は初めて尿意を感じ、担架のままで放尿した。

九時ごろになり、下流で人声がする。戦友たち

が迎えに来てくれた。中隊基地にたどり着き、早速衛生兵の手当を受けた。私の背骨の中央と、ほか一カ所に盲管創、さらに六カ所、小さな傷があった。腹巻をしていた事と、応急手当がよく、出血を最小限に止めた事がよかった。ここであっさり口糧を水に溶いて、丸二日目に初めて食物を口に入れた。

昼ごろ命令があり、私は野戦病院に下る事になり、衛生兵が担送はできないという。手ごろの杖を拾って、雨外套をかぶり、雑のう一個を持って歩く姿は、我れながら哀れである。中隊でもらった米が二合ほどと乾パンが二個、トボトボと傷をいたわりながら歩いて、薄暗みの中に、野戦包帯所と書いたものを見つけて行くと軍医は直ちに手当をしてくれる。

終わると衛生兵に連れられて横穴に入った。この穴はかなり広いけれど、すでに三人の患者がいてウメいている。私は外套を敷くところりと横になる。異臭が強く鼻をついて来る。

もう、四月四日の朝を迎える。私は十日ほど前にのぼって来た山道を、杖を頼りに一人トボトボと歩いた。雨期には遠いが、この山中は常に霧が立ち込めて、山肌はいつもジメジメしている。イナパンを出発してからの約二十日間、身体に付着した血さえ拭っていない背中がこたえる。老人のように腰をかがめて杖をたよりに何キロか歩いた。

第二の包帯所に到着した。衛生兵は今までにく丁寧であったが、肝心の軍医がなかなか来てくれない。二時間も待たされた軍医が簡単な治療をして、今夜中にアリタオの野戦病院に歩いて行け、と指示された。衛生兵が九時ごろには患者収容車が来るから待つようにと教えてくれた。

この辺りはあのサクラサク陣地に追及の時一泊した、あの司令部のある辺りで、砲兵陣地のあるイムガンではないかと思う。

小川のほとりでは重傷の患者たちが仰向けに捨てられたように転がっている。私は小さな木のも

とに外套を敷いて横になった。人の往来が激しくなり、車の照明灯が見えて患者が次々と積み込まれて行く。私もその何回目かによく乗車する事ができたが、装甲兵車の振動がひどく傷に響く。

四月五日、よほどの悪路であろう、兵車の振動は激しく、私にとっては歩くよりも苦しい。それでも午前三時ごろ、アリタオの病院に到着した。

病院とは名のみで、竹林やマンゴーの樹の下に急造された掛け小屋であり、スコールを避けるだけの天井がある、簡単なものである。無論、戸も壁もない。どの小屋も患者でいっぱいであり、血の臭いが鼻につく。食塩注射をする者、うめき続ける兵、顔の見分けのつかない下士官、私は同部屋にいる患者二十人ほどの中に誰か同隊の者はいないかと訪ねたが、それらしい人はいない。

私は再び死ぬ方法を考える。この壕から出よう、そうすれば敵弾に当たるであろうから。私は僅かに動いてみた。とても痛い。しかもこの壕の深さは一メートル五十はある。もう駄目か、傷の痛み

は増し、腹の中が煮えたぎる。加えて夕食に食ったものは全部その場へ吐き出した。

私は苦しみの限りの表現をして壕内の兵に訴えた。私は「敵前だぞ！」という将校の言葉もふり切ってわめき叫んだ。もう駄目だ。私は三度自決を思いたち腰の剣をソツと抜こうとした。そのとき、私のそばで腹ばいになり私の背中をさすっていた山本が気付いた。

「何をする！」と言って私の手を払い、剣の中心を抜いて取り上げた。「殺してくれ、殺せ！」と私はわめき続けた。水をくれといってもくれない。山本は水は駄目ですという。将校が「自決するな、ここには五人しかいないんだぞ」といった。彼の言葉を聞くと私は余計に怒鳴った。「殺せ、殺してくれ」。私は気が狂っていくように思えた。もはや敵も味方もない、この苦しみから逃れるために早く死にたい。

こうして数日が過ぎる。夜になり、重傷患者の多くは次の病院に送られた。広くなった病棟で、

心地よい風を受けながら寝ていると、急に空襲警報で、ドカン、ドカンと爆撃である。三機のノースアメリカンが道路に沿って飛んでいる。隣の病棟にいた下士官が、こんな奴が落されて来たといつて拳の大きさの破片を持って来た。よく見るとその破片の先はカミソリのように薄く尖って、まだ熱い。私はゾツとした。

飛行機が去ると、直ちに二人の重傷兵が担ぎ込まれて来た。一人の兵は腰と大腿部をえぐり取られていた。もう一人は大腿部と向う脛に破片創を受けて、顔色が悪いけれど割合に平然としている。四月十日、夕食が終わると、私は次の病院へ移る事になり、九四貨車に乗る。途中道路修理中が多く、到着したのは夜半を過ぎていた。

夜が明けて、仮設の病棟の多い事に驚いた。何十棟もあるだろう。この辺りは竹林が多く、そのすべてが病棟のようである。私の傷は痛むけれど、自分の事はできる。ここの病院に来ての二十日間、毎日なす事もなく朝食を待ち、空襲におびえ、そ

して夕食を待つ。食事の少ない事に不満をいい、無為の日々であった。

前線にいる戦友たちの苦しみも、そして再び戦場に立とうという心もない。どうにかして日本に帰れないか、帰れなくとも、住民として軍人でない生活がしたい。そればかり考えていた私に退院命令が出た。イナバンへの復帰である。

あの切り込みで負傷してから一カ月、私は夜明けを待つて病院を出た。私は病院で教えられた通り、小川にそって東に向かって、にぎり飯を食いながらトボトボと歩き、小さな村落を越すと、サトウキビ畑があった。あれほど欲しかったものである。

畑の中に入り、丈余もあるキビをへし折って噛んだ。甘い甘い、私は夢中で四本を噛んだ。満腹すると十本ばかりを切り取って背中に負った。小川はだんだんと末広くなり十メートルばかりになった。この川がああイナバンに通ずる川だ。そして夕方には待望のイナバンに到着した。

中隊の残留者の五人が私を迎えてくれた。本部に行き、残留隊長の軍医に申告、傷の手当を受け、新しく私の給与を受けて中隊に帰る。もう五月半ばになっているがイナバンはあのことと変わりなく、空襲のない平和な村である。中隊は私を入れて六人となったが、多くはマラリア患者で、下士官がいないので誰彼もなく食糧を集めては、自由に生活し、一日おきに本部に治療に行き。付近の部落に出掛けては物々交換をして米や砂糖、タバコさえも手に入れている。

ここはやはり天国である。

【解 説】

比島に派遣された戦車第二師団は、昭和二十年一月八日、米軍のリングエン湾上陸開始と共に出動命令が下る。上陸後の米軍の攻撃の勢いは止まらず、バレテ峠に迫り、戦車第二師団の筆者たちの部隊も二月五日にバレテ峠を越える。

このバレテ峠では鉄兵団（第十師団など）が守

備していたが、部隊は砲弾や爆撃で破壊された道路の修理をしながらの敗走となり、車の上から見る山道は曲りくねり、樹木に覆われた細い道は車を通るには精いっぱい、前を行く車の前灯や後尾灯がホタルが飛ぶように交わって、ようやく長い峠を抜けてサンタフェに到着、空襲をさけて川岸のさけ目に宿営したりする。

その後は、比島の日本軍は山中への敗走となり、筆者たちも幾多の苦難の中での後退行となる。小隊に分散し、この負傷兵や患者は、部隊に捨てられ小グループでの敗走では自活できなくなれば自決せよといわれる。このような敗走の中でも古兵のいびりがあるという。

この体験記では中隊の総攻撃の切り込み隊としての体験と、負傷してから終戦までの山中彷徨の苦勞を描いている。

終戦について八月十九日ころ、戦友が何枚かの投降ビラを拾って来たのを見ると、

『日本は天皇の命により、無条件降伏をした。』

すべては天皇の命令である。そのために米軍は発砲及び空爆を停止した』という意味のものであった。

「私は何だか本当のようだと思った。でもよく考えてみると、ここ数日は砲撃はなく、またロッキードもグラマンも来てない。本当かも知れないぞ」と、そう思い直すと急に元気が出たという。

筆者の自宅の庭には、「不戦」碑を建立している。その像は山中でひざをついた兵士の像であった。

自らのルソン戦場体験を語りながら、無謀な戦争を振り返り、無惨にも死んでいった戦友の御魂に思いを馳せている。そして、この『ルソン島敗残実記』は、同氏の戦友を思う鎮魂の記録でもあると思わずにはいられない。

体 験 記

福島県 荒明 文衛

私は、大正十（一九二一）年六月三十日、福島県河沼郡高寺村外二ヶ村組合村大字東松原杉山で、農業の父貢、母鶴栄の兄弟十人の長男として生まれました。

昭和十六（一九四一）年四月、徴兵検査を受け、甲種合格で、現役兵として、昭和十六年十二月十二日、朝鮮歩兵第七十六連隊に入隊、第一機関銃中隊自動車班に編入されました。同年十二月二十二日、洪儀に着き、直ちに国境の警備に就きました。

昭和十七年一月八日は陸軍記念日に当たり、夜、兵団長閣下の閲兵、訓示がありました。訓示では「君たちは消耗品である。不足すれば一銭五厘のはがきを出せば、いくらでも兵を集められる。日本国は物資が乏しいため兵器と被服を大切に、こ